

2) クリ=栗

クリはブナ科クリ属の総称で、日本、朝鮮半島、中国、西アジアからヨーロッパの地中海岸、アフリカ、アメリカの東部から中部にかけて分布する。葉は長楕円形で、縁には鋸歯があり、花は雌雄異花で、新梢の葉腋に尾状の花穂を上向きにつける。下部の葉腋に付く花穂は長い雄花穂で、上部の葉腋に付く花穂は雌花穂で基部に1~2個付ける。花には独特の匂いがあり、虫媒花で受粉する。秋に実が熟すと通常は3つの堅果が顕れる。根は地中深く張り細根は菌根を作り菌と共生する。ニホングリは変化に富んでおり、刺の退化したトゲナシグリ、一花穂に多くのイガを付けるヤツブサグリ、一個のイガに多くの堅果があるハコグリなどの変種がある。和名の起こりは果皮の色が黒いので、これがクリになったという説や、落ちた実が石塊のようであるところから、石を意味する古語「クリ」からとか、朝鮮語『ku』が転じたものとか諸説がある。学名は『*Castanea crenata*』、属名はギリシャ語のクリから来たラテン古名で、種小辞は「円鋸歯」のという意味である。イギリスでは『japanese chestnut』、フランスでは『marron』、中国では『栗』であるものの、これは日本の栗とは異なり別種の『甘栗』のことを指している。

栗の栽培の歴史は古く、穀類や豆類などと同様に、冬を越すための大事な食料として貯えられてきた。中国では紀元前5000年頃の仰韶(ヤンシャオ)時代の遺跡から、栗やハシバミなどの堅果が発掘され、3000年以上も前から栽培されていたという。『詩経』や『論語』の中でも栗の栽培について記され、『史記』の「貨殖列伝」にもその記述が見える。日本でも縄文時代の遺跡から、しばしば栗の大木が出土する。特に有名なのは青森県の『三内丸山遺跡』で、直系1mに及ぶ栗の大木を立てた跡が正確な間隔をおいて6個も発掘されている。栗の木は腐りにくいため船舶や枕木、建築土木材、器具などにもよく用いられており、古代人もその辺のところはよく理解していたようで、大規模な建造物の柱として用いたものと思われる。三内丸山の建築物が何であったかは、今後の研究を待たねばならないが、港の入り口に築かれた望楼のようなものであった可能性が高い。タブの木のところでも見てきたように、出雲大社の前身とも相通ずるものがあつた。こうした巨木文化を伴った遺跡は、目下のところ日本海岸にのみ見られ、そこがまたなんとも不思議なのである。ただこの時代、外国からの渡来人が日本にやって来たのは、もっぱら日本海であつたから、そのことと何か関係があるのかもしれない。

栗は『古事記』にも『日本書紀』にも登場する。『日本書紀』の「持統天皇紀」には、次のような一説が見える。

詔(ミコト)して天の下をして桑・紵(カラムシ=麻の一種)・梨・栗・蕪菁(アヲ)

等の草木を勧め植ゑ令(シ)む。

一方『万葉集』では「久利」または「栗」として詠んだ歌は3首ある。中では何といても

山上憶良の歌が特に有名である。

瓜食(ウリハ)めば子供思ほゆ 栗食めば況(マ)して思(シ)ばゆ 何處(イツク)より
来(キ)かりしものそ 眼(マカヒ)にもとな懸(カ)かりて 安眠(ヤスイ)しなさぬ

古文獻に栗が登場するのは『日本書紀』の「応神紀」19年で、国樺人が来朝し、菌(キノコ)年魚(アユ)とともに栗を献上したという記録がある。また『延喜式』には丹波や但馬が、すでに栗の産地であったことが記されている。

栗は古来、神の木とされてきた。東日本では陰暦正月の14日から16日の小正月の飾りとして栗の若木を山から迎える地方や、門松に栗の若木を添えるところもある。この風習は西日本ではもっと一般的で、苗代の種蒔きや田植えの日に田の水口に栗の木を挿す地方もある。島根県には栗の花を詠んだ「栗流れ」という田植え歌がある。また青葉の付いた栗の枝で、にわか神籬(ヒモロギ=古代、周囲にときわ樹を植える神座としたところ)とする地方もある。また栗の実を供物とする地方も多く、近畿地方では9月9日の節句を栗節句といい、栗御飯を炊き栗の贈答をする習慣がある。(05-01-09-4 キクの項参照) 奈良県の談山神社では九月の祭りに堅果として栗、イチヨウ、カヤの実が供えられた。ヨーロッパでもイタリアでは11月11日の聖マルティンの日には、ガチョウ料理を食べて、貧しい人々に栗の実を分け与える風習がある。『播磨国風土記』には、渋のない栗の実がなるという栗の木伝説があり、京都府の宇治田原町には、よく剥ける栗の伝説が今日に伝わる。これは『宇治拾遺物語』(ウジシュウイモノガタリ)にある大海人皇子(オオアマノミコ=02-01-06-2 参照)、後の天武天皇が、焼き栗と茹で栗を植えたという伝説によるものであり、近江国の栗太郡には、群全体を枝が覆うほどに大きな栗の木があり、樹木の王者だったという物語がある。

北海道のアイヌ人でも栗の実は大事な食料であったから、「神の植物性食物」とされ、イガを剥く棒も使い終わると一定の場所に納められた。栗の自生地は北海道の西南部が北限であったから、栗は本土から伝わったものとする伝承もある。ポロシリ岳の神の妻が日本の山へ行き、子供を生んで栗の実だけで育てたが、その子供をポロシリ岳に帰すとき、栗の実を持たせて山に蒔かせたという話がそれである。

栗は戦国時代には兵糧としても盛んに用いられていた。カロリーも高く保存もできたから、栗の実を干して臼でひき、皮と渋皮を剥いた「勝ち栗」は、「勝」に通じるものとして、戦陣では欠かすことができない縁起ものでもあった。昔から旅行などの携行食品としても広く用いられ、祝い事や正月の縁起ものとして用いられている。栗は人々の暮らしと深く関わってきたから、現在でもあちこちに名残りをとどめ、多くの民話や習俗が今日まで綿々と伝わっている。

栗の実の食用部分は肥厚した子葉で、炭水化物の他に蛋白質、脂肪、カロチン、ビタミン、鉄、リン、カルシウムなどを含んでいる。これを栗飯や栗きんとん、栗羊かん、栗鹿の子などにして、村祭りや祝事、正月料理にもちいてきたのである。



クリの雄花穂、独特の匂いがある(埼玉県嵐山町)。



満開になったクリの木(埼玉県嵐山町)。雄花穂ばかりが目立つが、どんな生物でも♂の数の数が圧倒的に多い。人間の場合は女 100 に対して男 110 ぐらいで、むしろ例外である。



完熟してイガが割れたクリの果実(埼玉県東松山市)。

[目次に戻る](#)